

# 「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究（国語）」

## 中間報告(平成27年1月)

本校がとまどいながら進めてきたこの1年の研究概要を、「ありのまま」に報告します。

### 1 研究の概要

今年度、本校は「高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」の国語についての研究校となりました。これは、文部科学省の事業であり、愛知県教育委員会が委託を受けたものです。この事業は、平成25年度から3か年にわたる研究事業であり、すでに理科と英語において研究が進められています。今年度より、国語、地歴・公民、数学が加わり、5教科で研究が進められることとなり、国語を本校が担当することになりました。

本校では、愛知県総合教育センターと連携を図り、御指導を受けながら研究を進めてきました。

#### (1) 研究のねらいなど

愛知県総合教育センターによって示された、本研究の実施要項は次のとおりです。

##### 1 研究の目的

課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、主体的行動力、構想力、そしてコミュニケーション能力の育成に向けて、国語科、地歴・公民科、数学科、理科、外国語(英語)科の学習活動について、学習到達目標を明確にしたパフォーマンス課題及びループリックを作成し、評価を行う。この評価手法の妥当性・信頼性を高め、生徒の資質・能力の向上を図るために実践的な調査研究を行う。

##### 2 研究の方法

国庫事業「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」における研究校5校からの研究協力委員と所員によって協議を行うとともに、顧問から指導を受けて各校での実践的な調査研究を進める。また、県教育委員会高等学校教育課が主催する「高等学校教育課程課題研究」と連携を図る。

##### 3 研究の内容

課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、主体的行動力、構想力、そしてコミュニケーション能力の向上を目指した指導と評価の方法について、共通教科の5教科それぞれの特性を生かした研究・開発を進める。

国語科についての研究顧問は、早稲田大学の町田守弘教授が担当されるということで、全体の体制が示され、本年度の研究はスタートしました。

#### (2) パフォーマンス課題って何？ から始まった

研究校を受けたものの、「パフォーマンス課題」だの、「ループリック」だの、見たことのない言葉にとまどい、何をすればいいの？ というスタートでした。

先進的な研究例は全国を捜してもほとんど無く、とりあえず何かを始めようという出発でした。しかも、すでに学年や持ち時間が決まっており、この研究の中心となる2人の教員は、2年生と3年生の「古典」を中心に受け持っているので、「古典」でやるしかないというのが実情でした。しかし、このことがかえってユニークな研究成果につながっていったと、振り返ってみて思います。

ちなみに、「パフォーマンス課題」と「ループリック」とは次のように説明されています。これらも研究を進めるにつれて、おぼろげながら見えてきたものです。

## ・パフォーマンス評価・パフォーマンス課題

「パフォーマンス評価」とは、知識やスキルを使いこなす（活用・応用・総合する）ことを求めるような評価方法（問題や課題）であり、様々な学習活動の部分的な評価や実技の評価をするという単純なものから、レポートの作成や口頭発表等により評価するという複雑なものまでを含んでいる。また、筆記と実演を組み合わせたプロジェクトを通じて評価を行うことを指す場合もある。

この「パフォーマンス評価」に当たって設定する「パフォーマンス課題」とは、様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題であり、具体的には、論説文やレポート、展示物といった完成作品（プロダクト）や、スピーチやプレゼンテーション、協同での問題解決、実験の実施といった実演（狭義のパフォーマンス）を評価する課題である。

この「パフォーマンス課題」は、高次の認知機能、対人関係能力、自律的な問題解決力を育成・評価するのにも適していると考えられている。

## ・ルーブリック

「ルーブリック」とは、この「パフォーマンス評価」に用いられるものであり、成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語からなる評価基準表である。

その類型として、「特定課題のルーブリック」のほか、特定教科や特定のジャンルに対応するルーブリックもある。また、学年を越えて長期的な成長を描き出す「長期的ルーブリック」もある。

これらを用いれば、幅広い資質・能力について、客観的な尺度と照らし合わせて評価することや、それぞれの子供の伸びも捉えることが可能となるという考え方に基づいている。

（「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」報告（平成26年3月31日）より）

### (3) 古典を演じる授業

「古典」の授業において、この研究課題に向けて実際に取り組んだ内容は、「古典を脚本化し、実演する」というものでした。「古典」嫌いな生徒に、「古典」を好きにさせ、「古典の文章を理解したい」と、意欲を喚起させるのがねらいでした。

学習指導要領に示された「国語総合」の言語活動には、「文章を読んで脚本化したり、古典を現代の物語に書き換えたりすること」とあります。この言語活動を生かして、パフォーマンス課題を考え、ルーブリックを使って評価するという実践を行っていくことになりました。

本校の生徒は、素直であり、おとなしく授業に参加し、出された課題をやりきることはできますが、主体的、意欲的に活動することがなかなかできません。生徒たちが主体的に動けるようにしたい、というのが本校の課題でもあります。そうした生徒たちが相手なので、果たして「演ずる」ということがうまくいくであろうかと、不安な思いを持ちつつ実践に臨むことになりました。

## 2 今年度の研究経過

研究授業及び研究協議を行ったものを中心に、今年度の取り組みを次にまとめました。

### (1) 研究授業・研究協議① 3年生「古典」『枕草子』『古今の草紙を』（平成26年6月17日）

中宮定子が女房たちに対して、古今和歌集の上の句をあげて下の句を応えさせるという、口頭試問を行っている場面を取り上げました。日々テストに追われている生徒たちには、身近に感じられるのではないかと思い、最初に実演させる教材として選びました。

活動そのものはパフォーマンス課題として評価することはできないと考え、まとめの文章を書かせ、それをパフォーマンス課題としました。

脚本化、実演という活動に対して、生徒の取り組みは大変意欲的でした。休み時間や授業後に、「少納言」、「定子様」などという言葉が飛び交っていました。また、羽織や扇などの小道具を用意したことで、生徒は盛り上がり、実演は大成功でした。

評価については、まとめの文章をルーブリックで評価することが適切なのかという疑問が残りました。また、ルーブリックの基準にも修正が必要であると考えました。

### 生徒の実演の様子『枕草子』「古今の草紙を」



### 【生徒作品例 まとめ文章 〈読む能力〉評価A】

『枕草子』が書かれた時代の貴族は、夜更かしをして遅くまでおしゃべりをしたりして、のんびりと優雅な生活を送っていたと思います。劇の脚本を作るときには、文の意味や流れだけでなく、人物の感情や性格まで考えなければいけなかったのが、より理解が深まりました。私の班では、定子様は女房たちにきつく叱るのではなく、あきれて嘆くというふうにしました。身分の高い人が、なりふり構わず大声で怒ったりしないのではないかと思ったからです。その人の身分や当時の生活も意識して感情を考えることができたと思います。この時代の和歌は、宮廷に仕える者は覚えておかなければならない知識で、その人が優秀であるかどうかを区別する基準だったのではないかと思います。

## (2) 研究授業・研究協議② 3年生「古典」『史記』「刺客列伝」(平成26年10月27日)

秦王暗殺というドラマティックな事件は生徒の興味を惹きつけやすいだろうと考え、この回の教材を設定しました。荊軻が秦王暗殺に向かうに際し、歌を詠み、部下たちと別れる場面です。

実演そのものを評価したいと思い、実演後に生徒に相互評価をさせました。パフォーマンス課題は荊軻の人物像のまとめとしました。しかし、当初考えた「荊軻の生き方について感じたこと、考えたことを述べなさい」というまとめは評価に苦労しました。研究協議で、この課題自体に無理があるという御指摘を受け、そこで、パフォーマンス課題を、脚本のリライトに修正しました。また、ルーブリックも、記述の数ではなく、深まりの層で立てた方が文学作品には適しているのではないかと御指摘があったので、修正したルーブリックで評価しました。その結果、生徒の深化を評価することができました。

実演の様子  
『史記』「刺客列伝」



授業の様子  
口語訳を確認中



実演前脚本

荆軻、観客に向かい、モノローグを述べる。  
荆軻 私は燕の国に仕えている荆軻である。  
太子丹の命令により、秦の始皇帝を暗殺する。  
一緒に行こうと思っていた人が来なかったり、  
太子丹が十三歳の子どもに行かせようとしたり、  
なかなか自分の思い通りにならないことが多かったが、  
もう始皇帝を暗殺しに行く決心がついた  
荆軻、振り返り、見送りの人々に向かい  
荆軻 風がものさみしく吹き、川の流れも冷たい。  
血気さかんな男は、今回去って二度と帰ってこない。  
見送りの人々、涙を流しながら見送る。  
荆軻、秦へ向かって歩き、二度と振り返らなかった。

リライトした脚本

荆軻、観客に向かい、モノローグを述べる。  
荆軻 私は燕の国の荆軻である。  
これから太子丹の命令により、秦王を暗殺しに行く！  
私には心に決めた補佐役がいたが、  
太子丹が未熟者である秦舞陽を補佐役に推薦した。  
さらには、私がなかなか行かなかったため、  
秦舞陽を一人で行かせようとした。  
出発するまで自分の思い通りにいかないことが多かったが、  
私を推薦してくださった田光先生のため、そして燕国のために、  
秦王を暗殺しに出発しようと決心した。  
荆軻、振り返り、見送りの人々に向かい  
荆軻 風がものさみしく吹き、川の流れも冷たい。  
血気さかんな男は、今回去って二度と帰ってこない。  
見送りの人々、しっかりした顔で見送る。  
荆軻、二度と振り返らなかった。

(3) 研究授業・研究協議③ 2年生「古典B」『源氏物語』「若紫」(平成26年10月27日)

光源氏と惟光が若紫を垣間見している場面を脚本化し、演じさせました。光源氏が、若紫の成長に興味を示していることと、若紫に藤壺宮への思慕を投影していることを読み取ってほしいと思い、それを惟光との会話に表現するという課題を設定しました。パフォーマンス課題としては、実演後に修正を加えたものを提出させ、評価しました。

授業前に作成したループリックのA評価は「光源氏が若紫の成長に興味を示していること、若紫に藤壺宮への思慕を投影していることを読み取ることができる。」としましたが、生徒は予想以上に光源氏の心情をくみ取ることができました。A評価の上の段階の気づきをする生徒への評価を作る必要を感じました。

研究協議では、授業に関する感想なども評価につなげることができるのではないかと御指摘があったので、その後、生徒に感想を書かせました。また、話し合いの中では気づけたことが、ワークシートには表現できていないので、パフォーマンス課題に改善の余地があると感じました。

【生徒の感想例】

- ・光源氏と惟光は遠い存在だと思っていたが、他の班の発表を聞くと、現代でもよくありそうな会話だなと親近感がわいた。
- ・今も昔も、人が思うことや、好きになった人を忘れられない気持ちは共通しているんだなあと感じた。垣間見しながら、男二人が女の子について話している様子は、現代と同じように「あの子かわいいね」などと男同士で話しているのが想像できて面白いと思った。
- ・セリフを考える上で、光源氏はどんなキャラでどんな性格か、光源氏と惟光の関係などを考えることができた。大切なセリフとそうでないセリフを考えることができた。

実演の様子『源氏物語』「若紫」



授業の様子実演後の脚本修正



(4) 研究授業・研究協議④ 3年生「古典」『蜻蛉日記』「うつろひたる菊」(平成26年12月10日)

作者道綱母が、他の女に宛てた夫の手紙を見つける場面を描いた「うつろひたる菊」を教材としました。和歌の解釈は生徒の苦手とするところであり、この教材を学習することで、他の古文でも和歌の解釈に役立てることができるのではないかと考えました。

パフォーマンス課題として、『蜻蛉日記』の別の章段(「泪杯の水」)の和歌の解釈を書かせ、作者の抱える背景やそれまでの経緯を踏まえて理解することを目標としました。

脚本化し、実演するという活動も3回目となり、生徒は確実にスキルアップしました。効率的な時間の使い方ができるようになり、演技も創意工夫が見られ、脚本もより現代的な解釈につなげられるようになりました。

今回は、発表直後に相互評価をさせました。ホワイトボードと付箋紙を使い、短時間で効果的な相互評価を実施できました。

授業前に作成したループリックでは、和歌が詠まれた状況と心情を分けて評価していましたが、提出された課題を見ると、生徒は分けて記述していなかったため、ループリックを実際の課題に合う形に変更しました。

【生徒の作品例 ワークシート(演技後の書き直し) 評価A】

うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならむとすらむ

疑わしいこと。よその女に送る手紙を見ると、私のところへ来るのを途絶えようとしているのでしょうか。



なんてことかしら。まさか他の女に手紙!? 私のところへはもう来ないというの!?

【生徒の作品例 ワークシート(演技後の書き直し) 評価B】

うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならむとすらむ

疑わしいこと。よその女に送る手紙を見ると、私のところへ来るのを途絶えようとしているのでしょうか。



あなた浮気しているでしょ。

【ループリック 当初のもの】

観点	A	B	C
和歌に込められた登場人物の心情を理解することができる。 (読む能力)	和歌が詠まれた状況を踏まえて、相手に対する感情が分かるような和歌の解釈を述べることができる。	相手に対する感情が分かるような和歌の解釈を述べる ことができる。	記述ができていない。
実演を経て、和歌の解釈を深めることができた。 (関心・意欲・態度)	実演を見て、和歌の解釈に沿って登場人物の心情理解を深めた解釈の書き直しをすることができる。	実演を見て、和歌の解釈の書き直しをすることができる。	和歌の解釈をすることはできるが、実演を見ても解釈を書き直すことができない。または、解釈ができない。

【ループリック 変更後のもの(「読む能力」の部分のみ)】

観点	A	B	C
和歌に込められた登場人物の心情を理解することができる。 (読む能力)	和歌の解釈として、道綱の母の、それまでのいきさつを正しく踏まえた兼家に対する感情を、和歌に用いられた表現に絡めて述べる ことができる。	和歌の解釈として、道綱の母の、それまでのいきさつを正しく踏まえた兼家に対する感情を述べる ことができる。	和歌の解釈として、道綱の母の、兼家に対する感情は述べてはいるが、それまでのいきさつを正しく理解できていない。または、感情を述べていない。

実演の様子『蜻蛉日記』「うつろひたる菊」



授業の様子・脚本を考える



(5) 研究授業・研究協議⑤ 2年生「古典B」『大鏡』「競射」(平成27年1月21日)

『大鏡』の有名な章段である「競射」の場面を教材としました。本文では3人の登場人物の様子は、第三者からの視点で描かれています。それを、それぞれの登場人物の視点から読み、心情をセリフとして表現し、人物像をとらえることを目標として授業を行いました。

今回の研究授業では、大勢の参観者があり、生徒たちが萎縮せずに演じられるか心配でしたが、まったくの杞憂に終わりました。生徒たちは、普段よりも張り切って実演してくれました。それどころか、前日には自主的に練習もしていました。グループ討議の場面でも、参観者に囲まれながら、平然と話し合いをやっていた。予想以上の動きに、感心させられました。

実演後に相互評価として、他のグループの実演について気づいたことを発表させ、自分の脚本に色ペンで加筆、修正させました。この修正した脚本と、それぞれの人物像をまとめたものをパフォーマンス課題としました。

ループリックについては、当初は3人まとめたものを考えましたが、表現が抽象的になってしまい、評価がしづらいつつ思ったので、登場人物3人それぞれについての視点からのものを作成しました。しかし、本文は道長対伊周・道隆という状況設定になっているので、その観点でもよいかとも思っています。パフォーマンス課題、ループリックともまだまだ検討の余地があると思います。

【ループリック】

観点	A	B	C
物語の展開を正しく理解し、実演に臨んでいる。 (関心・意欲・態度)	物語の展開を正しく理解するとともに、実演に当たって工夫をもって臨むことができる。	物語の展開を正しく理解できる。	物語の展開を正しく理解できない。
登場人物の人物像や心情を理解している。 (読む能力)	道長について、本文の展開や言動を根拠にして、剛胆な人物であることを理解できる。さらに、古典常識や時代背景などの知識から、より客観的な人物評価ができる。	道長について、本文の展開や言動を根拠にして、剛胆な人物であることを述べている。	本文の展開や言動から、道長がどのような人物かを評価して述べるができない。または、記述ができない。
	伊周について、本文の展開や言動を根拠にして、気が弱い人物であることを理解できる。さらに、古典常識や時代背景などの知識から、より客観的な人物評価ができる。	伊周について、本文の展開や言動を根拠にして、気が弱い人物であることを述べている。	本文の展開や言動から、伊周がどのような人物かを評価して述べるができない。または、記述ができない。
	道隆について、本文の展開や言動を根拠にして、外間を気にする人物であることを理解できる。さらに、古典常識や時代背景などの知識から、より客観的な人物評価ができる。	道隆について、本文の展開や言動を根拠にして、外間を気にする人物であることを述べている。	本文の展開や言動から、道隆がどのような人物かを評価して述べるができない。または、記述ができない。

【生徒の作品例 ワークシート(脚本に加筆、修正したもの)】

実演の様子  
『大鏡』『競射』



### 3 授業の工夫

授業を行う上で、いくつかの工夫がありました。それを紹介します。

#### (1) 小道具

生徒をやる気にさせるのに、様々な小道具は有効的でした。今回使った小道具の主なものは次のとおりです。

- 羽織——しっかりとした衣装は無理なので、ちょっと羽織る形で使え、便利でした。古着屋で格安に購入しました。
- 扇
- 和綴じの冊子
- 烏帽子——光源氏が着用したのは100均のフェルトで作りました。
- 小柴垣——学校にある使わなくなった竹箒を解体して作りました。
- 菊の花——造花
- 文箱
- 弓矢——100均で売っていたおもちゃを加工。磁石で黒板の的に貼り付くようにしました。



菊の花や、文箱など、小道具までも自分たちで演じた班もありました。

#### (2) グループ分け

脚本を書き、実演をするのはグループ活動を中心としています。そこで、グループ分けはどのように行ったかについて触れておきます。

一番最初は、指導者がグループを分けました。生徒の持つ特性などを考えて分けるなどしました。しかし、この方法だと今ひとつグループが活性化しませんでした。

そこで、2回目からのグループ分けは生徒に任せました。この方法の方が、活動が活性化し、特に役割等を指示しなくても、自分たちで役割を決め、どんどん進めるようになりました。

3年生の3回目の授業では、教室(特別教室を利用)にあらかじめグループに分けて机を配置しておき、そこに座ったものをグループとしました。

いずれにしても、指導者があまり手を出さずに、生徒たちに任せた方がうまくいくと感じました。

#### (3) ホワイトボードと付箋紙

研究授業④では、相互評価にホワイトボードを使いました。実演したグループに対する評価を、実演直後に書き込み、それを全員に示して見せました。同時に、付箋紙にも同じことを書き、各グループのものを集め、実演したグループにまとめて渡しました。

この方法は、短時間で有効に相互評価ができてよかったと思います。生徒たちも、喜んで記入していました。

ホワイトボードに記入する



各班から集めて、まとめられた付箋紙



### 4 成果と課題

#### (1) 生徒の意欲的な取り組み

今回の取り組みにおいて、何よりも顕著な成果は、生徒の授業に対する取り組み姿勢の変化です。それまで、嫌いで、面白くない教科であった「古典」が、楽しみで、面白い教科に変わったのです。

その姿勢は、例えば授業におけるグループワークの様子に如実に反映されています。50分の授業をフルに使って、脚本を作成している場面でも、全員が他ごとを話題にせず、一生懸命、相談しながらセリフや動きを考



えています。時には、席を立って演技を考えたり、本文を再確認したりと、一斉指導型の授業では考えられなかった姿です。

本校で行った研究発表会でも御指摘がありました。こうした授業が、従来型の授業で身につけてこられた力に決して劣ることのないように検証していくことが今後必要だと思います。しかし、生徒の様子を見る限り、意欲的な取り組み姿勢に変わったことで、これまで以上の力がついて行くであろうことを信じたいと思います。

生徒自身の手応えはどうであったかについては、研究授業④で行った自己評価から、意欲的に取り組めた様子や理解が深まった様子が分かります。

#### 【生徒の自己評価 『蜻蛉日記』「うつろひたる菊」】

評価項目	A	B	C
① 実演を見たり、和歌の解釈を書き換えることで、より詠み手の心情が理解できるようになった。	56.1%	43.9%	0%
② 和歌の中に現れる背景や気持ちを読み取ることができるようになった。	43.9%	56.1%	0%
③ 解釈・脚本化・実演に積極的に関わり、グループ(ペア)活動に貢献できた。	59.1%	39.4%	1.5%

#### 【「古典」の授業についての生徒の感想】

- 古典の授業は、ただ文を読むだけではよく分からないけど、内容や、その言葉に隠された意味を考えると、現代につながる部分もたくさんあり、興味深かったです。昔の日本の文化に触れることもできてよかったです。
- 3年間掛けて古典を学び、和歌などは、特に現代の人間関係と大差なく、身の回りのほのぼのとした日常や、夫婦のけんかシーンだったり、切なくなるような愛情ものだったり、共感できるものがあった、やっていた楽しかったです。
- 古典は、文を理解できれば面白い文ばかりだと思いました。でも、文が理解できないとさっぱり分からない。理解できるとドラマみたいで面白い。入試では理解できるように頑張りたい。
- 3年間でようやく古典を通して学んだのは、昔の人と今の人との考え方や生活の違いです。本文を読んでいるわりにくいのは、考え方も違うし、自分の持つ、行動に対する偏見や、予想と大きく違う場合があるからだと思います。古典は面白い科目でした。
- 3年間の授業を通して一番よかったのは、昔の文章でも嫌がらずに読めるようになり、昔の思想などにも興味を持つようになったことだと思います。現在の行事や慣習などに残っているものもあるので、行事の発祥や歴史を調べたくなったりして、自分の思考や好みにも影響があったのではないかと思います。これからも色々発見していけるといいなと思います。

## (2) パフォーマンス課題とループリックについて

パフォーマンスと聞いて、体を使って表現することと聞いていた最初の頃と比べると、この研究を通して随分といろいろなことを学びました。しかし、まだまだどのような設定をすればよいのか、有効な評価ができるのかは分からないところが多くあります。今後の研究課題です。

また、ループリックについても、設定の妥当性も含め、十分に理解できていないものです。こちらについても、今後の研究課題です。

本校で行った研究発表のときの研究協議で、高等学校教育課の栗木先生から御指導いただいた内容が、分かりやすかったのでここに紹介しておきます。

- パフォーマンス課題は、生徒が思考停止することなく、頭をフル回転して考えていく課題である。
- それを評価する物差しが評価規準であり、ループリックである。
- 評価規準とループリックの関係

指導案の「単元の具体的な評価規準」にある「登場人物の人物像や心情を理解している」というの

が、評価規準。すなわち、授業の枠組み

それに対して、何ができるようになったのかということを決めたのがルーブリックである。

評価規準に対して、こちらは評価の基準となるもの。

- ・ルーブリックの中のAは、この授業の中だけではなく、すでに学んで身につけた内容を使って考えることができるというレベルであり、より高い到達度という設定でよい。

### (3) 評価とは何か

この研究は「評価」に関する研究ですか、そもそも「評価」とはいったい何なのか、というのが大きな疑問になりました。そんな中で、「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」報告（平成26年3月31日）に書かれていた内容が、よく分かるものでしたので、ここに紹介します。しかし、この中にもあるように、今後の大きな研究課題であることには違いありません。

- 評価については、総合的な評価だけでなく、形成的な評価の重要性を認識する必要があり、評価を生かして指導や教育課程の改善を図ることが重要である。
- 資質・能力の育成のためには、「何を知っているか」ととどまらず、「何をできるようになったのか」を評価するために、実際に知識とスキルを活用する過程の質的な評価が必要になってきている。  
〈委員の意見から〉
- 評価を目的別に明確に区分すべき。まず、成績（順位）をつけるための評価か（評定）、活動改善のための評価か（評価）、の区別を明確にし、それによって、評価方法が異なることを教員に自覚させるべき。
- 「評価」と「評定」では中身が異なり、「評価」の方は活動の改善のために中身が出るはずだが、「評定」の方は基本的に順序付けや分類のために行うため、5段階などの数値や記号で位置を定めるだけであり、指導の改善に関する具体的な情報が入っていない。
- 「評価」と「評定」については、次の3つの要素が錯綜しているため、概念整理をする必要がある。
  - ① 「いつするのか」については、学習の途中の形成的評価、その前の診断的評価、学習の最後の総合的な評価がある。
  - ② 「評価」と「評定」の関係については、記述式に細かく「評価」という大きな概念があって、その中で数値等で表現しているのが「評定」。
  - ③ 「どれぐらいの詳しさにするか」については、総合的な評価は単純化されたものだが、非常に詳しい総合的な評価をする場合は、形成的な機能を持つこともあり得る。

### (4) 来年度に向けての課題

今年度は、とにかくよく分からないままに、「古典」を軸に進めてきました。今思えば、かなり無謀な設定であったと思います。しかし、そのことが逆に非常に興味深く、効果的な結果につながったと自負しています。

そこで、来年度に向けては、今年度の成果を活かして新たな展開を考えていかなければならないと思っています。また、今年度の行ってきたものも継続して行っていく予定です。

とりあえず、現在の時点で考えている来年度に向けての課題は次のようなものです。

- 「国語総合」を中心に現代文分野の研究
- 長期的な視野に立った学習計画の立案
- 他教科で利用可能なスキルの研究

かなり大変なものもあると思いますが、チャレンジ精神をもって取り組んでいきたいと思っています。

## 5 まとめ

平成26年11月20日に文部科学省から出された、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」の中には、次のようなことが述べられています。

- 学ぶことと社会とのつながりをより意識した教育を行い、子供たちがそうした教育のプロセスを通じて、基礎的な知識・技能を習得するとともに、実社会や実生活の中でそれらを活用しながら、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要である……  
そのために必要な力を子供たちに育むためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）や、そのための指導の方法等を充実させていく必要があります。こうした学習・指導方法は、知識・技能を定着させる上でも、また、子供たちの学習意欲を高める上でも効果的である……
- 「アクティブ・ラーニング」などの新たな学習・指導方法や、このような新しい学びに対応した教材や評価手法の今後の在り方についてどのように考えるか。また、そうした教材や評価手法の更なる開発や普及を図るために、どのような支援が必要か。

この諮問は、次の教育課程の改定につながると考えられるものです。この諮問を読んで、本校で行っている研究調査が、ここにつながっていくものであるということに改めて認識した次第です。

今回の研究を通して感じたのは、繰り返すようですが、生徒の主体的な学びによる可能性の広がりです。生徒たちは、脚本を考え、どのように演じるかを工夫する中で、まさに課題の発見と解決を行っています。ここに示された「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」をまさに実践しているのです。

また、そうして得られた結果を私たちがどのように評価につなげていくかということも、「新しい学びに対応した教材や評価手法」の検討課題です。

今年度は、本当に暗中模索状態で、試行錯誤をしながら取り組んできました。先行研究例のほとんど無い取り組みで、大変ではありましたが、研究発表会で、この研究の顧問の早稲田大学の町田教授が、「生徒も楽しくやっているが、先生方も楽しくやるのが大事です」とおっしゃっていたように、確かに生徒がどのような反応してくれるのかと、楽しんでやってきた部分も多くあります。今後も、決して楽なものではありませんが、生徒の能力の伸長と可能性を励みにして、研究に取り組んでいきたいと思っています。

最後に、研究発表会での町田先生の言葉を紹介しておきます。

「垂直型の授業で実現できなかったことを水平型の学びによってどのように克服し、可能性を広げていくかが課題です。今日の授業を見て、果敢にチャレンジをしている様子が見え、まさにこれからの広がりを予感し、期待したいと思います。」



本校での研究発表会の様子が、朝日新聞に紹介されました。平成27年1月23日朝刊 地域版